

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大原中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	習得した知識を「点」から「線」へとつなげ、より確実な定着へと昇華させることにある。学年が上がるにつれて学習内容が複雑化・高度化するため、基礎知識のわずかな欠落が、後の大きなつまずきに直結する懸念がある。特に数学や理科など、前の単元の理解が次の学びに影響する教科においては、定着に個人差が生じないように、さらにきめ細やかな習得確認が必要である。今後は、ICT端末等も活用しながら、個々の理解度に応じた定着支援を強化する。単なる暗記に留まらず、知識を正しく使いこなせる状態を目指し、短時間で繰り返し効果的な復習の機会を設けることで、基礎学力の質をさらに高めていく。
思考・判断・表現	理科における実験結果の考察や、数学の記述式問題における論理展開など、より高度で抽象的な思考を要する場面にさらなる向上への余地が残されている。全教科を通して「書く活動」の質を一層重視する。具体的に、結論に至るプロセスを可視化する思考ツールの活用や、自分の考えを論理的に組み立てるトレーニングを強化する。特に理科などの観察・実験においては、予想と結果の乖離を自分の言葉で論理的に説明する場面を増やし、高次の思考力と表現力を兼ね備えた、より深い学びの実現を目指す。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt;基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が二極化している。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt;一問一答形式の問題の正答率は高いが、その根拠を基にした問題に対する知識を徹底できるような時間が足りない。</p>	<p>・学習者主体の授業への改善を図り、生徒自身が主体的に、「知識及び技能」を獲得し、「思考力、判断力、表現力等」を働かせる授業づくりの実践【単元ごとに設定】</p> <p>・生徒一人ひとりの気付きを大切に、教科等横断的な視点に立ち、多面的・多角的なアプローチで、個別最適な学びを実現する。【毎時間設定】</p>
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt;物事を筋道立てて考えることに改善の余地がある。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt;主張を述べるだけではなく、他者の考えの理由を聞くことがやや不十分であり、深い学びが不十分である。</p>	<p>・自ら気付いた事柄について、主体的に他教科の学習内容と関連付け筋道立てて掘り下げていくことで、教科等横断的な視点に立ち、探究的な学び(じしゃく)の視点を取り入れた授業の実施【毎時間設定】</p> <p>・自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり、表現を工夫して書いたりすることに力を入れる。【毎時間設定】</p>

全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)  
 <小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	生徒が自身の習得状況をメタ認知し、主体的に基礎を固める「個別最適な学び」の環境づくりを重点的に行った。具体的には、ICT端末を活用したドリル学習や、単元ごとのセルフチェックシートを導入し、生徒が「自分は何ができて、どこに課題があるか」を把握した上で、自ら復習に取り組める時間を設定した。今後の課題は、習得した知識を長期的に保持し、必要な場面で自在に活用できる「質の高い定着」である。生徒が自ら学んだ知識を関連付け、体系化できるような振り返りの時間をさらに充実させる。生徒が自律的に知識をアップデートし続ける「学び方」の習得を支援し、さらなる学力の下支えを図る。
思考・判断・表現	B	生徒が自ら問いを立て、多様な視点から解決策を導き出す「協働的な学び」の実践が実を結んでいる。授業では、教師が解法を提示する前に、生徒が資料や事実を基に仮説を立て、対話を通して考えを深めるプロセスを重視した。今後は、生徒が試行錯誤の過程を可視化できるように思考ツールの活用を日常化し、失敗を恐れずに多様なアプローチを試みる「探究的な態度」をさらに醸成していく。生徒一人ひとりが、自らの思考の枠組みを広げ、複雑な課題に対して主体的に立ち向かえる表現力の育成を目指す。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、「文脈に即して漢字を正しく使うことができる」問題に課題がみられた。また、数学の「数と式」において、「素数の意味を理解している」問題に課題がみられた。言葉や文の意味を考える習慣をつけたり、数学用語を自分の言葉で説明する練習を、授業内で実践していくことが大切だと感じる。「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできる」との問いに肯定的な回答の割合は87.6%であった。協働的な学びを通して、深い学びに繋げていきたい。	
思考・判断・表現	国語の「読むこと」において、「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考える」問題に課題がみられた。また、数学の「数と式」において、「式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明する」問題に課題がみられた。「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりする」との問いに肯定的な回答の割合は90.4%であった。論理的思考力や批判的読解力を鍛えるためにも、学習者主体の授業を今後も目指していく。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)
- ③分析共有(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	全学年・全教科で市平均を上回る中、定着が極めて高い。第1学年の数学や第2学年の国語では、基礎的な用語や計算、漢字の習得が学力の下支えとなっている。基礎的な公式や用語の理解は進んでいるものの、それらを組み合わせさせて解く「定型問題」でのケアレスミスや、定着の個人差が僅かに見られる。今後は、これら習得した知識を確実に「自動化」させるため、ICT端末を活用したドリル学習や短時間での定着確認テスト(小テスト)を継続し、中層以下の生徒が「わかっているが解けない」状態にならないよう、個別のフィードバックをさらに充実させる必要がある。
思考・判断・表現	社会科を中心に良好な結果が得られた。資料から情報を抽出し、根拠を持って記述する設問において、第1学年では市平均を上回るなど、論理的思考力の基盤が全般的に醸成されている。理科に代表される「未知の事象への応用力」である。高学年とも理科の正答率は5割台に留まり、特に実験結果から法則性を導き出すような「思考・判断・表現」の高度な設問で正答率が伸び悩む傾向にある。今後は、全教科で「既習事項を活用して未知の課題を解決する」場面を意図的に設定する。具体的には、根拠を明確にした言語活動を強化し、単なる知識の再生に留まらない、高次の思考力を伴う学力の伸長を図る。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	PCでの「ミライシード」の利用やミニテスト、伝え合いの時間を多く取り入れることにより、基礎的・基本的な知識・技能の習得を目指した授業を実施している。	変更なし
思考・判断・表現	B	各教科内で公開授業を行い、実践できる「学習者主体の授業」とはなにか、協議を行った。講師を招いた研修会を行い、探究的な学び(じしゃく)の視点を取り入れた授業を実施している。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

# 令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大原中】

⑥	次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	全体的には、基礎的・基本的な知識・技能の定着が図れた。しかし、個人差が大きいことから個別に必要な支援を講じていく必要がある。また、次年度の改善策としては、概念の必要性や意味の理解を深めるために、各教科の見方・考え方を働かせ、子ども主体の学びとなるような授業改善に努めていく。	
思考・判断・表現	心情の読解や自分の考えを表現する問題で課題が見られたため、主体的に未来を創造する力を育むための授業改善をしていきたい。全ての教科等で、創造力の育成を目標に学習者主体の授業改善を行う。また、学習者主体振り返りシート等で学び方の振り返りを行い、学習者で共有を図っていききたい。	

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題>基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が二極化している。 <指導上の課題>一問一答形式の問題の正答率は高いが、その根拠を基にした問題に対する知識を徹底できるような時間が足りない。	⇒ ・各教科で得た知識・技能を教科等横断的な視点に立ち、「これって〇〇に似てる！」が出てくる授業づくりの実践【毎時間設定】 ・生徒一人ひとりの気付きを大切に、教科等横断的な視点に立ち、多面的・多角的なアプローチで、個別最適な学びを実現する。【毎時間設定】
思考・判断・表現	<学習上の課題>物事を筋道立てて考えることに改善の余地がある。 <指導上の課題>主張を述べるだけでなく、他者の考えの理由を聞くことがやや不十分であり、深い学びが不十分である。	⇒ ・自ら気付いた事柄について、主体的に他教科の学習内容と関連付け筋道立てて掘り下げていくことで、教科等横断的な視点に立ち、探究的な学び(じしゃく)の視点を取り入れた授業の実施【毎時間設定】 ・自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり、表現を工夫して書いたりすることに力を入れる。【毎時間設定】

⑤	評価(※)	調査結果の振り返り(4月)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	①結果分析(管理職・学年主任等) ②調査結果の振り返り(児童生徒による振り返り) ③分析共有(児童生徒の美意識把握) 職員会議・校内研修等	各教科で得た知識・技能を教科等横断的な視点に立ち、「これって〇〇に似てる！」と発問する機会を設けたが、生徒から出てくるものが少なかった。そのため、教員から〇〇と似ていると伝えることが増えてしまった。
思考・判断・表現	B		教員相互による指導教科(道徳・特別活動・総合的な学習の時間を含む)を超えて共通の参観シートを用いた授業参観を全教員が行った。その結果、教科横断的な指導を意識した授業を検討することができた。フィードバックを基に授業改善に努めた。また、全ての教科において年度末に「教科のまとめ」として各学年の取組をまとめた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	数学の「データの活用」において、特に「与えられたデータから最頻値を求めることができるかどうかをみる」に課題が見られた。正答率は低くないが、無回答率が高く、長い問題文に対しての読解力が不十分であると考えられる。R6年度全国学力・学習状況調査「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」における肯定的な回答の割合は89.6%であった。子ども主体の学びとなるような授業を今後も継続していく。	
思考・判断・表現	国語の「話すこと・聞くこと」において、「話し合いの中の発言について説明したもの」を捉える問題に課題がみられた。解答類型を見てみると、話し合いの中身をしっかりと読まずに、問題文から解答を予測しているように考えられる。「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができますか」といける、肯定的な回答の割合は93.2%であることから、探究的な学びや、協働的な学びの機会を確保しながら、子ども主体の学びとなるような授業を今後も継続していく。	

①結果分析(管理職・学年主任等)  
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語・数学・社会・理科でさいたま市の平均を大きく上回ることができた。基本的な計算問題や文脈に即した漢字を使う問題の正答率は非常に高かった。系統性でつながりのある内容について、既習を確認したり、繰り返し学習させたりして、さらなる定着を図っていく。	
思考・判断・表現	国語・数学・社会・理科でさいたま市の平均を大きく上回ることができた。国語は「根拠を明確にし、自分の考えが伝わる文章への工夫」、数学は「連立方程式の過程を解釈すること」、社会は「資料を基に考察すること」、理科は「粒子を柱とする領域」に課題が見られた。子ども主体の学びへの授業改善を図りながら、思考力・判断力・表現力を高めていきたい。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	全国学力学習状況調査において、基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が二極化していると読み取れた。研究推進委員会の会議で確認しながら、引き続き学校全体で共有し、取り組んでいく。	変更なし
思考・判断・表現	B	教科等横断的な視点に立ち、探究的な学び(じしゃく)の視点を取り入れた授業を実施している。	教員相互による指導教科を超えた授業参観を行う。その際、共通の参観シートを用いてどの教科でも同じ視点で教科等横断的な指導ができるようにする。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)